

「薬剤化」論の検討

——精神医療における薬物療法を事例として——

東京大学大学院 榎原克哉

1 目的

本報告の目的は、医療化論・生物医療化論の系譜に連なる薬剤化論を検討し、具体的な事例に対する分析概念として捉え直すことにある。代表的な論者であるアブラハム（2010）は、「薬剤化」は「医師や患者が、医薬品を用いて社会的・行動的・身体的状態を治療する、ないしは治療が必要であるとみなすプロセス」と定義する。本報告ではまず、これまでの医療化論や生物医療化論との関連という観点から薬剤化論を位置づける。「薬剤化」の議論は、薬事規制の影響や医薬品使用の普及のプロセスといった、複数のアクターを対象とした包括的・趨勢的な記述を重視する傾向にあるが、本報告においては「薬剤化」がミクロレベルにおける経験的研究にどのように応用可能であるのかという観点から考察する。

2 方法

第一に、薬剤化論をこれまでの医療化論の流れに位置づけて考察すべく、(1)ゾラ、フリードソンなどに代表される70年代の医療化論、(2)クラークらによって展開された生物医療化論（Clarke et al. 2003）、(3)製薬産業や消費者主義の影響力を重視する近年の医療化論（Conrad 2007）との関連から「薬剤化」概念を検討しつつ、その内容を明らかにする。第二に、「薬剤化」を分析概念として捉え直すべく、精神医療における薬物療法に関する経験的な研究群を事例として考察する。精神医療を事例として選択する理由は、薬剤による対処に抵抗が生じやすい領域において、どのようにその使用が受容されるのかを明示するのに適していると判断するためである。事例の考察においては、海外の先行研究の検討が中心になるが、国内の知見として報告者自身が行った調査も併せて参照する。

3 結論

結論として、(1)薬剤化概念を用いるには、薬剤が使用される場面を明確に設定する必要がある点、(2)薬剤化を取り巻く専門知や日常的な経験も考察対象に含める必要がある点の、二点を指摘する。(1)に関しては、「薬剤の使用の拡大」といった一般的な現象のみを考察するのではなく、実際の使用という文脈において、薬剤が持つ社会的な意味や位置づけがどのように現れるのかという水準の考察が要請されることを明らかにした。(2)に関しては、医薬品使用という現象を限定的に考察するのではなく、他の競合する専門知や技術がもたらす影響や、人々が複数の選択肢のなかからどのような解釈や選択を行っているのかといった点を加味した考察が必要である点を示した。

文献

Abraham, John, 2010, 'Pharmaceuticalization of Society in Context: Theoretical, Empirical, and Health Dimensions', *Sociology*, 44(4): 603-622.

Clarke, Adele E, et al., 2003, 'Biomedicalization: Technoscientific Transformations of Health, Illness, and U.S. Biomedicine', *American Sociological Review*, 68: 161-194.

Conrad, Peter, 2007, *The Medicalization of Society: On the Transformation of Human Conditions into Treatable Disorders*, The John Hopkins University Press.